



久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 3 9 号

1 9 8 7 年 1 1 月 1 0 日

式内石楠尾神社の由緒      皇大神宮   関根   正典

鶺鴒沼の老松に昔を語らせたら（その一）田中まさ子

長生き之歌

榛葉   アキ

鶺鴒 沼 を 語 る 会

延喜式内、相模国十三社、式内石楯尾神社、由緒

皇大神宮 宮司

関根 正典

第五十一代平城天皇の御代大同三年（８０８）創建された、延喜式内相模国十三社、式内石楯尾神社は相殿神とともに、当、皇大神宮の御殿に御同座である。

当所古老の口碑に皇大神宮西側の石楯尾、宮で毎年四月十七日石楯尾まつりとよばれる祭儀がとり行われていたこと、及び皇大神宮境内の参道が二途あり、一途は皇大神宮、他の一途正前に大破損に及んだ社殿のあったことなど伝承されていたが、これが石楯尾神社の社殿であったのである。この社殿の破損にたえ得ずして、式内石楯尾神社の神霊に御動座を請い願い、すぐ傍の皇大神宮の御社殿に遷座がなされたのであろうが、これはいつの年のことであったか審らかならず、爾来今日まで年久しく皇大神宮に御同座であられたのである。

この式内石楯尾神社は、皇大神宮の御鎮座より、もっと早い時代に、現在の皇大神宮の神域に創建された旧社で、国史に記載のある神階叙位しかも官社に列せられた名社である。

皇大神宮の御造営竣工を機に長きにわたりって途絶えていた石楯尾まつりが四月十七日を祭日と定めて再興された。

皇大神宮所蔵の棟札のうちにつぎの一体がある。

|         |           |      |
|---------|-----------|------|
| (表) 奉勸請 | 延喜式内相     | 八幡大神 |
|         | 式内石楯尾神社相殿 | 鎮座   |
|         | 模国十三社     | 春日大神 |

(裏) 大同三年創立長久元年再建正和二年再建天正二年再建

#### 式内石楯神社資料

第五十五代文徳天皇実録天安元年（857）五月丙辰（廿日）の条に『是日相模国に在る従五位下石楯尾神官社に預る。』と列官社の記事がある。大同三年（808）式内石楯尾神社が、此の地に創建されてから、神階をうけ更に天安元年には遂に官社に列せられている。

此の頃、高座郡に鎮座する寒川神社と有鹿神社とともに神階を進められているが、このように式内石楯尾神の列官社のことや、寒川神、有鹿神の神階叙位の記事が相ついで国史に所見することは、当時の高座郡の開発が急速に進められ、経済的にも大きな発展をとげ中央に注目されることになったことを示している。

このような相模の旧社、式内石楯尾神社の境内に神明宮（現・皇大神宮）が勧請され、後世この地域が伊勢神領の大庭御厨となり、更に神明宮がこの神領の総鎮守と定められてからは、名社、式内石楯尾神社も神明宮の盛名のかげにかくれて、末社のようになってしまったのであろう。と、

皇学館大学刊「式内社調査報告」第十一巻より

## 鵠沼の老松に昔を語らせたなら

田中まさ子

(その一) 内藤千代子のこと

昭和の初めの頃のことである。

海へ出る道筋には、(今の鵠沼海岸2, 3丁目あたり)見上げるばかり、幾抱えもある又幾百年も立っている、老松が沢山あり、昼もうす暗い松林があつた。小田急海岸駅の裏がわにも松林があつた。

古びた築屋根の家があつた、廻りの石組みも風雅で、どこの別荘だろうと思って土地の古老に聞いたら、その家は、女流作家の内藤千代子が住んでいた家であるとのことであつた。

私は、馬込時代から親しくつき合っていた、作家今井達夫さんから聞いた話であるが、かの女は、女学世界の流行作家で、鵠沼で生れ、鵠沼文人の草分けであろうという。

大正14年3月に胸を患って死んだ、33歳の若さで、書いた作品は今残っていないのが残念であるが、博文館が印税を1割2分も出していたとのこと、高い印税である当時の女としてわたいした人である、この頃の女の職業と言えは髪結いさんか、女給さんかであった。印税で家をなし子供を育てていたと聞くが、彼女も「日陰」の人であった主人の名は知られているが明かす必要はないと考えられる。

私わ鵠沼に住んで、鵠沼を知らなかった。大きな屋敷で門構えの立派な家の勝手口にわ土地の人やら、女中さんらしい人が出入して、一体御主人はどんな人なのかと通る度に思っていた。

戦争が始まって、防空演習、配給、などでその家の奥さまがたと、町

内会で初めて会った、こんな祭いだったから、みな暖かい気取りのない付き合いが出来た。敗戦のつらさは同じに味わった仲間である。

大きな家に住んでもぜいたくはもう出来ない、本宅から、ナシのつぶてでは別宅婦人は生きられない、旦那が栄えている時は、ハデで派手ではあるが、男の身勝手さの裏がわで、忍従の日を送り、日陰に生きた別宅夫人を私は終りの日まで付き合った。

頼る人のない、又幼い時から、自分で歩いて生きて来た強い女姓に戦後は会うことはなく、鶴沼には大金持の別荘はなくなったようだ。

小さなアパートの一室で一人で暮し一人で死んで行つた、鶴沼の女姓史を色どる女人は、かつては別荘夫人で華やかな生活を持っていたが、未をとげない哀れさを私は忘れることが出来ない。

これは、別荘地鶴沼の一部分なのかも知れない、今は明るい堅実な町に変わりつつある。

おわり

# 長生の歌

作詩 曲

橋葉アキ

鉄道唱歌替歌

人生昔は五十一だぞ  
今はちやうどまだつばき  
七十一ハハは花ばかり  
るでようやくは実をむすぶ

ニとえられぬこの命  
朝ごとと夜ごとに心から  
生きる幸福感謝して  
みんな仲よく暮らそうよ

流れる水はくさらない  
氷るいすうー氷軍  
体は頭もほどもどに  
使ってまはそうるまじは